藤村全集

第七卷

筑摩書房版

本　文　紙　三菱製紙株式會社
ク　ロ　ス　株式會社山川商店
本文製版印刷　株式會社精興社
製　　本　株式會社鈴木製本所

第七巻　目次

新生

序の章……三
第一巻……一五
第二巻……二三九
解題……四九九
校異……五〇一

新

生

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

序の章

一

『岸本君――僕は僕の近來の生活と思想の斷片を君に書いて送らうと思ふ。然し實を言へば何も書く材料は無いのである。默して居て濟むことである。君と僕との交誼が深ければ深いほど、默して居た方が順當なのであらう。舊い家を去つて新しい家に移つた僕は懶惰に費す日の多くなつたのをよろこぶぐらゐなものである。僕には働くといふことが出來ない。他人の意志の下に働くといふことは無論どうあつても出來ない。そんなら自分の意志の鞭を背にうけて、嚴肅な人生の途に上るかといふに、それも出來ない。今までに一つとして纏つた仕事をして來なかつたのが何よりの證據である。空と雲と大地とは一日眺めくらしても飽くことを知らないが、半日の讀書は僕を倦ましめることが多い。新しい家に移つてからは、空地に好める樹木を栽ゑたり、ほんの慰み半分に畑をいぢつたりするぐらゐの仕事しかしないのである。そして僅かに發芽する蔬菜のたぐひを順次に生に忠實な蟲に供養するまでである。勿論厨房の助に成らう筈はない。こんな有樣であるから田園生活なんどは毛頭思ひも寄らぬことである。僕の生活は相變らず空な生活で始終して居る。そして當然僕の生涯の絃の上には倦怠と懶惰が灰色の手を置いて居るのである。考へて見れば、これが生の充實といふ現代の金口に何等の信仰をも持たぬ人間の必定墮ちて行く羽目であらう。それならそれを悔むかといふに、僕にはそれすら出來ない。何故かといふに僕の肉體には本能的な生の衝動が極めて微弱になつて了つたからである。永遠に墮ちて行くのは無爲の陷穽である。然しながら無爲の陷穽にはまつた人間にもなほ一つ殘されたる信仰がある。二千年も三千年も言ひ古した、哲理の發端で總合である無常――僕は僕の生氣の失せた肉體を通して、この無常の鐘の音を今更ながらしみ〴〵と聽き惚るゝことがある。これが僕の

このごろの生活の根調である……』

郊外の中野の方に住む友人の手紙が岸本の前に披げてあつた。

これは數月前に岸本の貰つた手紙だ。それを彼は取出して來て、讀返して見た。若かつた頃は彼も友人に宛てゝ隨分長い手紙を書き、また友人の方からも貰ひもしたものであつたが、次第に書きかはす文通もほんの用事だけの短いものと成つて行つた。それも葉書で濟ませる場合には成るべく簡單に。それだけ書くべき手紙の數が一方には增えて來た。一日かゝつて何通となく書くことはめづらしくない。其意味から言へば、彼の前に披げてあつたものは、めつたに友人から貰ふことの出來る手紙でもなかつた。手紙の形式をかりて書いて寄して吳れた手紙でない手紙だ。讀んで行くうちに、彼は何よりも先づ人生の半ばに行き着いた人一人としての友人の生活のすがたに、その告白に、ひどく胸を打たれた。ある夕方が來て見ると、あだかも彼方の木に集り是方の木に集りして飛び騷いで居た小鳥の群が、一羽默り、二羽默り、がや〳〵とした樂しい鳴聲が何時の間にか沈まつて行つたやうに、丁度左樣した夕方が岸本の周圍へも來た。中にも、この手紙を吳れた友人が中野の方へ新しい家を造つて引移つてからといふものは、ずつと聲を潛めてしまつた。ほんとに默つてしまつた。

讀みかけた手紙を前に置いて、岸本は十四五年このかた變ることのない敬愛の情を寄せたこの友人に自分の生涯を比べて見た。

二

岸本は更に讀みつゞけた。

『……郊外に居を移してから僕の宗教的情調は稍深くなつて來た。僕の佛教は勿論僕の身體を薫染した佛教的氣分に過ぎないのである。僕は涅槃に到達するよりも涅槃に迷ひたい方である。幻の清淨を體得するよりも、寧ろ如幻の境に暫く倦怠と懶惰の「我」を寄せたいのである。睡つて居る中に不可思議な夢を感ずるやうに、倦怠と懶惰の生を神祕と歡喜の生に變へたいのである。無常の宗教から蠱惑の藝術に行きたいのである……斯樣に懶惰な僕も郊外の冬が多少珍らしかつたので、日記をつけて見た。去年の十一月四日初めて霜が降つた。それから十一日には二度目の霜が降つた。四度目の霜である十二月朔日は雪のやうであつた。そしてその七日八日九日は三朝續いたひどい霜で、八ツ手や、つはぶきの葉が萎えた。その八日の朝初氷が張つた。二十二日以後は完全な冬季の狀態に移つて、丹澤山塊から秩父連山にかけて雪の色を見る日が多くなつた。風がまたひどく吹いた。然し概して言へば初冬の野の景色はしみ〴〵と面白いものである。霜の色の蒼白さは雪よりも滋くて切ない趣がある。それとは反對に霜どけの土の色の深さは初夏の雨上りよりも快濶である。またほろ〳〵になつた苔が霜どけに潤つて朝の日に照らさるゝ時、大地の色彩の美は殆ど頂點に達するのである。この時の苔の綠は如何なる種類の綠よりも鮮かで生氣がある。恰も綠玉を碎いて棄てたやうである。また恰も印象派の畫布を見るやうでもある。僕はわびしい冬の幻相の中で、こんな美しい綠に出會はうとも思ひがけなかつたのである。僕の魂も肉もかゝる幻相の美に囚はれて居る刹那、如幻の生も樂しく、夢の浮世も寶玉のやうに愛惜せられるのである。然しながら自然の幻相は何等の努力の發現でないのと等しく、その幻相の完全な領略はまた何等の努力をも待たないものである。夢をして夢と過ぎしめよ……』

藝術的生活と宗教的生活との融合を試みようとして居るやうな中野の友人には、相應な資產と儉約な習慣とを遺して置いて行つた父親があつて、この手紙にもよくあらはれて居る靜寂な沈默を味ひ得るほどの餘裕といふものが與へられて居た。岸本にはそれが無かつた。中野の友人には朝に晩にかしづく好い細君があつた。岸本にはそれも

無かつた。彼の妻は七人目の女の兒を產むと同時に產後の激しい出血で亡くなつた。

山を下りて都會に暮すやうに成つてから岸本には七年の月日が經つた。その間、不思議なくらゐ親しいものの死が續いた。彼の長女の死。次女の死。三女の死。妻の死。つゞいて愛する甥の死。彼のたましひは搖られ通しに搖られた。ずつと以前に岸本もまだ若く友人も皆な若かつた頃に、彼には靑木といふ友人があつたが、靑木は中野の友人なぞを知らないで早く亡くなつた。あの靑木の亡くなつた年から數へると、岸本は十七年も餘計に生き延びた。そして彼の近い周圍にあつたもので、滅びるものは滅びて行つてしまひ、次第に獨りぼつちの身と成つて行つた。

三

まだ新しい記憶として岸本の胸に上つて來る一つの光景があつた。續きに續いた親しいものの死から散々に脅された彼は復たしてもその光景によつて否應なしに見せつけられたと思ふものがあつた。それは會葬者の一人として麴町の見附內にある敎會堂に行はれた弔ひの儀式に列つた時のことだ。黑い布をかけ、二つの花輪を飾つた寢棺が說敎臺の下に置いてあつた。その中には岸本の舊い學友で、耶蘇信徒で、二十一年ばかりも前に一緖に同じ學校を卒業した男の遺骸が納めてあつた。肺病で亡くなつた學友を弔ふための儀式は生前その人が來てよく腰掛けた敎會堂の內で至極質素に行はれた。やがて寢棺は中央の腰掛椅子の間を通り、壁に添うて敎會堂の出入口の方へ運ばれて來た。亡くなつた人のためには極く若い學生時代に敎を說いて聞かせるから其日の弔ひの說敎までして面倒を見た牧師をはじめ、親戚友人などがその寢棺の前後左右を持ち支へながら。

岸本は灰色な壁のところに立つて、その光景を眺めて居た。その日は岸本の外に、足立、菅の二人も弔ひにやつ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

て來て居た。三人とも亡くなつた人の同窓の友だ。
『吾儕の仲間はこれだけかい。』
と菅は言つて、同じ卒業生仲間を探すやうな眼付をした。
『誰かまだ見えさうなものだ。』
と足立も言つた。
會葬のために集まつた人達は思ひ〳〵に散じつゝあつた。しばらく岸本は二人の學友と一緒に教會堂の内に殘つて、歸り行く信徒の群なぞを眺めて立つて居た。そこへ來て親戚の代りとして挨拶した年老いた人があつた。三人とも世話になつた以前の學校の幹事さんだ。
『可哀さうなことをしました。』
とその幹事さんが亡くなつた學友のことを言つた。
『子供は幾人あつたんですか。』
と岸本が尋ねた。
『四人。』
と幹事さんは言つて見せて、『後がすこし困るテ』といふ言葉を殘しながら別れて行つた。
二人の學友と連立つて岸本が歸りかけた頃は、會葬者は大抵出て行つてしまつた。人氣の少い會堂の建物のみが殘つた。正面にある尖つたアーチ風の飾、高い壁、今が今まで花輪を飾つた寢棺がその前に置かれてあつた質素な説教臺のみが殘つた。會葬者一同が立去つた後の澤山並べてある長い腰掛椅子のみが殘つた。弔ひの儀式のために特に用意したらしい説教臺の横手にある大きな花瓶と花と葉とのみが殘つた。そろ〳〵熱くなりかける時分のことで、教會堂風な窓々から明く射しこんで來る五月の日の光のみが殘つた。

岸本は立去りがたい思をして、高い天井の下に映る日の光を眺めながら、つく〳〵生き殘るものの悲哀を覺えた。その悲哀を多くの親しい身内のものに死別れた後の底疲れに疲れて來た自分の身體で覺えた。

足立や菅を見ると、若かつた日の交遊が岸本の胸に浮んで來る。つゞいてあの亡くなつた青木のことなぞが聯想せられる。岸本と一緒にその教會堂の石階を降りた二人の學友は最早青木なぞの生きて居た日のことを昔話にするやうな人達に成つて居た。

四

それから岸本は二人の學友と一緒に見附を指して歩いた。久し振で足立の家の方へ誘はれて行つた。岸本を教會堂まで送つて行つた車夫は空車を引きながら、話し〳〵歩いて行く岸本の後へ隨いて來た。

『何年振で會堂へ來て見たか。』そんな話をして行くうちに、舊い見附跡に近い空地のところへ出た。風の多い塵埃の立つ日で、黄ばんだ砂煙が渦を卷いてやつて來た。その度に足立も、菅も、岸本も、背中をそむけて塵埃の通過ぎるのを待つては復た歩いた。

蒸々と熱い日あたりは三人の行く先にあつた。牧師が説教臺の上で讀んだ亡い學友の略傳――四十五年の人の一生――互にそのことを語り合ひながら、城下らしい地勢の殘つたところについて緩慢な坂の道を靜かに上つて行つた。

『先刻、僕が吾家から出掛けて來ると、丁度御濠端のところで皆に遭遇した。僕は棺に隨いて會堂までやつて行つた。』

と言出したのは三人の中でも一番年長な足立であつた。
『吾儕の組では、最早幾人亡くなつてるだらう。』
それを岸本が言ふと、足立は例の精しいことの好きな調子で、
『二十人の卒業生の中が、四人缺けて居たんだらう。これで五人目だ。』
『まだ誰か死んでやしないか。もつと居ないやうな氣がするぜ。』それを言つたのは菅だ。
『この次は誰の番だらう。』
あの足立の串談には、菅も岸本も默つてしまつた。しばらく三人は默つて歩いて行つた。
『この三人の中ぢや、一番先へ僕が逝きさうだ。』と復た足立が笑ひながら言出した。
『僕の方が怪しい。』岸本はそれを言はずに居られなかつた。
『ナニ、君は大丈夫だよ。僕こそ一番先かも知れない。』と菅は串談のやうにそれを言つて笑つた。
『ところがネ、僕はマヰるものなら、斯の一二年にマヰつてしまひさうな氣がする……』
この岸本の言葉は二人の學友には串談とも聞えたか知れないが、彼自身は自分で自分の言つたことを笑へなかつた。煙のやうな風塵が復た恐ろしくやつて、彼は口の中がジャリ〳〵するほど砂を浴びた。
その日は葬式の歸りがけにも關らず菅と二人で足立の家へ押掛けた。
『斯うして揃つて來て貰ふことは、めつたに無い。』それを足立が言つていろ〳〵と持成して呉れた。思はず岸本は話し込んで、車夫を門前に待たせて置きながら、日暮頃までも話した。
『皆一緒に學校を出た時分――あの頃は、何か面白さうなことが先の方に吾儕を待つて居るやうな氣がした。斯うして居るのが、是が君、人生かねえ。』
言出すつもりもなく岸本はそれを二人の學友の前に言出した。

『左様ヂ、是が人生だ。』と菅は冷静な調子で言つた。『僕は左様思ふと變な氣のすることがある。』

『もうすこし奈様かいふことは無いものかね。』

と岸本が言ふと、足立はそれを引取つて、

『そんなに面白いことが有ると思ふのが、間違ひだよ。』

足立の部屋に菅と集まつて見て、岸本はそこにも不思議な沈默が舊い馴染の三人を支配して居ることを感じたのであつた。それほど隔ての無い仲間同志にあつても、それほど喋舌つたり笑つたりしても、互に心が默つて居た。

『どうしても斯の儘ぢや、僕には死に切れない。』

岸本はまた、それを言はずに居られなかつた。

これらの談話の記憶、これらの光景の記憶、これらの出來事の記憶、これらの心の經驗の記憶――すべては岸本に取つて生々しいほど新しかつた。何かにつけて彼は自分の一生の危機が近づいたと思はせるやうな、ある忌しい豫感に脅されるやうに成つた。

五

學友の死を思ひつゞけながら、神田川に添うて足立の家の方から歸つて來た車の上も、岸本には忘れがたい記憶の一つとして殘つて居た。古代の人が言つた地水火風といふやうなことまで、しきりと彼の想像に上つて來たのも、あの車の上であつた。火か、水か、土か、何か斯う迷信に近いほどの熱意をもつて生々しく元始的な自然の刺激に觸れて見たら、あるひは自分を救ふことが出來ようかと考へたのも、あの車の上であつた。

生存の測りがたさ。曾て岸本が妻子を引連れて山を下りようとした頃に斯うした重い澱んだものが一生の旅の途中で自分を待受けようとは、奈何して思ひがけよう。中野の友人にやつて來たといふやうな倦怠は、彼にもやつて來た。曾て彼の精神を高めたやうな幾多の美しい生活を送つた人達のことも、皆空虛のやうに成つてしまつた。彼はほと〳〵生活の興味をすら失ひかけた。日がな一日侘しい單調な物音が自分の部屋の障子に響いて來たり、果しもないやうな寂寞に閉される思ひをしたりして、しばらくもう人も訪ねず、冷い壁を見つめたまゝ坐つたきりの人のやうに成つてしまつた。これはそも〳〵過度な勞作の結果か、半生を通してめぐりにめぐつた原因の無い憂鬱の結果か、それとも母親のない幼い子供等を控へて三年近くの苦艱と戰つた結果か、いづれとも彼には言ふことが出來なかつた。

中野の友人から貰つた手紙の終の方には、斯樣な事も書いてある。

『岸本君、僕はもう默して可い頃であらう。倦怠と懶惰は僕が僕自身に還るのを待つて居る。眼も疲れ心も疲れた。ふと花壇のほとりを見やると、白い蝴蝶がすがれた花壇に咲いた最初の花を探しあてたところである。そしてその蝴蝶も今年になつて初めて見た蝴蝶である。僕の好きな山椿の花も追々盛りになるであらう。十日ばかり前から山茱黄と櫁の花が咲いて居る。いづれも寂しい花である。ことに櫁の花は臘梅もどきで、韵致の高い花である。その花を見る僕の心は寂しく顫へて居る。』斯う結んである。

中野の友人には子が無かつた。曾て岸本の二番目の男の兒を引取つて養はうと言つて呉れたこともあつた。しかし、頑是なく聞分けのない子供は一週間と友人の家に居つかなかつた。結局岸本は二人の子供を手許に置き、一人を郷里の姉の家に托した。常陸の海岸の方にある乳母の家へ預けた末の女の兒のためにも月々の仕送りを忘れる譯にはいかなかつた。彼はもう默つて、默つて、絶間なしに勞作を續けた。

岸本の四十二といふ歳も間近に迫つて來て居た。前途の不安は、世に男の大厄といふやうな言葉にさへ耳を傾け

させた。彼は中野の友人に自分を比べて、斯様(こん)な風に言つて見たこともある。友人のは生々とした寛(くつろ)いだ沈默で、自分のは死んだ沈默であると。その死んだ沈默で、彼は自分の身に襲ひ迫つて來るやうな強い嵐を待受けた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com